甘地の獅子舞

舞がどんどん進んでいき、次はいよいよ「早がわり」だ。
「がんばれ！二人とも、絶対成功させてよ……。」
ぼくは、まるで自分が舞っているような気持ちになって、ドキドキしながらいのった。
今、舞を演じている真也さん、裕樹さんは、同じ甘地地区でぼくといっしょに獅子舞の練習をしている高校生。二人は、ぼくにとって兄のような存在だ。

甘地地区では、今まで長い間演じられていなかった獅子舞の「早がわり」という伝来の技を復活させたいと、ここ数年話し合われてきた。あるけいこの日、祭り保存会の人たちは、失われつつある獅子舞の技を知っている後藤さんというお年寄りを姫路から招き、だれかに受けついでもらおうと話をしていたそうだ。たまたまそこへ、真也さんと裕樹さんが練習にやってきていた。話を聞いて、二人がちょう戦したいと名乗り出たという。そして、毎日毎日、時間をかけて「早がわり」の練習にはげんできたのだ。
ぼくは、初めてその練習を見た時、いったい何が始まったのかと思った。上に乗る真也さんと、土台になる裕樹さん。二人の一生けん命に取り組む姿にびっくりした。裕樹さんは、ぐっと歯を食いしばってバランスをとっている。そのかたの上では、真也さんがかた車の状態から立ち上がろうとしていた。ぼくなんか、かた車してもらうだけでも高くてこわいのに、かたの上に立つなんて考えられない。それなのに二人はこわいとも、しんどいとも言わない。ただ、もくもくと練習に打ちこんでいた。
「あの高さで獅子をかぶるとすごいだろうな。空で舞っているように見えるんじゃないか。きっと、今までにないはく力にちがいない。」
ぼくはそう思った。
ある日、練習が終わった時、ぼくは聞いてみた。
「なんで裕樹さんは、そんなに一生けん命やってるん。」
「そりゃ、技がすたれてしまうからや。」
裕樹さんは、そう言った。
「すたれてしまう？」
ぼくは思わず聞き返した。
「そうや、すたれさせたら、あかんからや。」
そして、裕樹さんは続けてこう言った。
「後藤さんは若いころこの村に住んでいてな、伝来の技を絶やさないように先ぱいから教えてもらっていたらしい。厳しかったけれどすごく楽しかったんやと、その時のことをまるで若者のように話してくれた。その話を聞いているうちに、だれかがやらなあかんと思うようになったんや。」
今度は真也さんに聞いてみた。

「かたの上に立つのってこわくない？　ぐらぐらするやろ。」
「そりゃこわいわ。でも、裕樹君がしっかりバランスをとってくれると立ちやすいんや。それに、教えてくれている後藤さんたちも若いころやっとったんやし、ぼくらにできんことはないやろ。」
真也さんはあせをふいた。
「でもな、練習して、前にできなかったことができると、うれしいで。だんだん技が完成していくのが、なんか楽しいんや。二人でどうすれば安定してできるのか考えてるんやで。それにな、今、ぼくらがこの技を覚えへんと、永遠にこの技は消えてしまう。だから、どうしてもできるようにならなあかんのや。」
真也さんは真けんに言った。

みんなが帰った後も、二人は、何度も何度も練習をくり返した。いつもはじょう談ばかり言い合っておもしろい二人なのに、「早がわり」の練習の時だけは、とてもじゃないけれど声をかけることができず、ぼくは、ただじっと見ているだけだった。
練習はくる日もくる日も続いた。かたの上で、おそるおそる立って曲がっていた真也さんのこしが、練習を重ねるごとに、バランスをうまくとれるようになり、きれいにのびていく。
裕樹さんも、最初のうちは足がぐらぐらしていたのに、どっしりと立って支えることができるようになっていった。練習に打ちこむ二人は、とてもかっこよかった。
後藤さんも、村のおじいさんたちも、二人の練習の様子を真けんなまなざしで見守っていた。

祭りでの舞は、クライマックスをむかえた。さあ、いよいよあの技が始まる。
ぼくはぐっと手に力をいれた。足にも力が入っている。心臓もバクバクしてきた。地域の人たちも、後藤さんもみんな一点を見つめていた。そして、次のしゅん間……。
ぼくたちは、空で舞う獅子を見た。
「すごい、すごい、すごい！」
大成功だった。みんな、大きなはく手を二人におくった。ぼくはガッツポーズをしていた。
横にいた後藤さんが、
「よくあの技を復活させてくれた。伝統は、その時その時の熱意がないと、つながらへん。」
とつぶやくのが、聞こえた。
ぼくは自分のことのように、二人のことがほこらしかった。
祭りが終わった。

舞終えた裕樹さんと真也さんは、いつもよりずっと立派に見えた。
「ぼくも、きっと……。」
ぼくは、心の中でつぶやいた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。